

Title	土族語の一方言-Aus die Volksdichtung der Monguorの言語-
Author(s)	角道, 正佳
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 23 P.179-P.200
Issue Date	1991-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/16027
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

土族語の一方言

—*Aus die Volksdichtung der Monguor* の言語—

角道正佳

はじめに

この資料(Schröder(1959, 1970)以下VM I, IIと略記する)は Schröder が1948年11月25日から1949年6月30日にかけて、青海省の互助の沙堂川の甘家堡で当時67歳の Tuo Ifula (朶先生)の助けを借りて、1903年 mula-xonitsipang(「小さい羊飼いの小屋」という意味)生まれの娘婿の Guānbo-sdzia(mgon po skyabs) から採取したものである。この資料は当時まだ正書法を持っていなかった土族(モンゴル)語を記録したものとして非常に貴重なものである。1961年7月27日付けの Róna-Tas あての Schröder の手紙には、この二人は Narin-guor と Xalci-gol の中間の方言を話し、二人とも Narin-guor と Xalci-gol から馬で一、二時間の所に住んでおり、お互いに一時間から一時間半離れていると記されている(Róna-Tas (1966:192 註1))。

土族の名称

土族という名称は解放後のものであり、様々な呼び方をされてきた。Schröder (1964:143)には民族名として、自称としては tsiḡān moṅḡol, moṅḡol kun, タンゲート人からは karlong (mkhar lung), rgya hor, 漢人からは「土人」、Prževalski からは Dalden, Dolden, Daldy, Huc と Gabet からは Dchiahour と呼ばれたと記されている。

Потанин (1960:374-375)には、三川では自称が tšagan mongol であり、モンゴル人からは dalda, doldo, dolon xeletei doldo 等と呼ばれていると記

されている。

『土族簡史』には自称としては、互助、大通、天祝では「蒙古爾(mongol)」, 「蒙古爾孔 (mongol kun)」, 「察汗蒙古爾 (qagan mongol)」, 民和三川地区では「土昆」, 甘肅省卓尼地区では「土戸家」といい、他称としては藏族から「爾(hor)」漢、回族からは「土人」, 「土民」とよばれ、漢文資料には「西寧州土人」, 「土民」として現れ、解放後は「土族」と呼ばれることになったという説明がある。

土族語の方言は大きく互助方言と民和方言に分かれ、互助方言はさらに Xalči gol, Narin guor (Narin gol), Fulan nura に分けられるとされている（魯長壽(1986:60)では互助方言を東溝、大通、五十の三方言に分けている）。Tuo lfula と Guānbo-sdzia の言語形成期を過ごした場所が違うので、いま問題にしている資料（VM I, II）の下位方言名を地域名で表現することはできない。

『土漢詞典』（東溝方言）で au で表記されている語（Dictionnaire Monguor-Français 以下DMFと略記する（Narin guor 方言）では ū に対応する）は、VM I, II では o または ɔ に対応する。一方『土漢詞典』で uu で表記されている語は VM I, II では iu, u に対応する場合と o, ɔ に対応する場合とある。また『土漢詞典』で oo で表記されている語は VM I, II では o, ɔ, uo に対応する。この関係を Xalči gol 方言の例も付け加えて図示すると次のようになる。

	東溝方言 『土漢詞典』	Xalči gol 方言 Тодаева	VM I, II	Narin guor 方言 DMF
a 類	uu	ȳ	o, ɔ, iu, u, (uo)	ū
b 類	au	ȳ	o, ɔ, (uo)	ū
c 類	oo	ō	o, ɔ uo	ō, uo
d 類	ee	ē, ie, iē	e, ē, iē	ē, ie, iē
e 類	ai	ē	e, ē, e, ä	ē

VM I, II の o, ö だけ見ると, a, b, c 類のどれに対応する母音かわからないけれども, b 類に対応する母音には iu, u は現れないし, uo も極めて稀にしか現れないという特徴がある。Xalči gol 方言では a 類と b 類とが区別されないし, d 類と e 類とが区別されないことがある。VM I, II においてもよく似た特徴が見られるが, Xalči gol 方言ほどではない。a 類には iu, u が現れるが b 類には現れないから, 一応区別があるといえる。しかし b 類と c 類との区別はかなり曖昧である。e 類は e がもっとも普通の母音であるから d 類と e 類も一応区別がある。VM I, II の特徴は b 類と c 類との区別が非常に曖昧だという点である。c 類には uo が頻繁に現れるが, b 類には稀にしか現れないという点がわずかに両者を区別する特徴である。VM I, II の特徴は uo, ie のような上昇二重母音が他方言より頻繁に現れるという点にも認められる。

子音については Xalči gol 方言と VM I, II は音節末の l が保たれているのに対し, Narin guor 方言では r に変化している。

形態素の面での三方言の違いとしては次のようなものがある。

		Xalči gol 方言	VM I, II	Narin guor 方言
A	位格	-pa	-rë	-re
	形動詞過去	-can	dzan	dzan
	仮定副動詞	-ca	-dza	-dza
B	造格	-la	-la	-ra
	三人称命令	-(lax)re	-lagë	-ragi

AについてはVM I, II は Narin guor 方言に近く, BについてはVM I, II は Xalči gol 方言に近い。

Schröder はVM I, II 以外に土族語版のゲセル物語を記録している。これは彼の死後 Heissig の解説付きで出版された (Heissig (1980) (GR と略記する))。GR は Schröder の遺稿が手書きのままの形で出版されているため, 非常に多くのバリエーションがそのままの形で記されている。これについては

角道(1988a)で述べた。一方, VM I, II は, 余剰的な要素を取り去って少し整理した形で出版されているため, GR に比べてバリエーションは少ないが, やはりかなりの数のバリエーションが確認できる。これについては角道(1990a)を参照されたい。VM I, II と GR とは表記体系が異なっていて, 後者で記されている鼻母音は前者にはなく, また後者の dzi, tsi, si は前者では dzi, tsi, si となっている。しかも GR には鼻母音~口母音とか si~si のようなバリエーションが存在するため, 両方のテキストの語彙を同一の語彙集に含めることはできない。VM I, II に限定したのは以上のような理由からである。

テキストの内容

VM I と VM II の内容は次のとおりである。

凡例		通し番号
VM I	Schröder (1959)	
Xoni	羊	1-467
M I	マンガス	1-145
M II	マンガス	1- 79
M III	マンガス	1- 83
M IV	マンガス	1- 71
XM	黒馬	1-323
S I	賛美歌 I	1- 18
S II	賛美歌 II	1- 15
B	子牛	1- 99
SN	鴨のつがい	1- 81
G	チベット, 中国, アムド	1- 78
A	おうむ, 孔雀, かっこう	1- 78
F	農作業	1- 57
Sch	火酒	1- 28

W	織機	1- 20
Br	Brottdämpfen	1- 37
xue	格言と比喩	1- 28
VM II	Schröder (1970)	
	神話	1-832

出典を示すために、上述の凡例記号および数字を用いる、数字はテキストの通し番号を表す。しかし初出とはかぎらない。参考として『土漢詞典』の表記を付記する。jighasi~jaghasi のような場合を ji/aghasi と略記し、udur~dur のような場合を (u)dur と略記する。『土漢詞典』に該当する語がないけれども『土漢対照詞彙』にある場合は、その表記を () に入れて記す。以上のどれにもない場合は、Dictionaire Monguor-Français (DMF と略記する) の表記を一部簡略化して記す。

Tib. はチベット語からの借用語である。Róna-Tas(1966), 『土族語詞彙』, Schröder 自身の註を参考にしてチベット文語形または祖形を記す。§はRóna-Tas(1966) の出典を表す。

Ch. は中国語(漢語)からの借用語である。現地の発音ではなく普通話の発音を拼音字母で記したものである。

土族語の動詞語幹は各種の辞書ですべて母音で終わっているように記されていることが多いが、VM I, II のテキストからは語幹末母音が決定できない場合がある。こういう場合は子音語幹として記した。

テキストの音声的特徴

VM I, II はある程度の整理がなされているとはいえ Schröder が音素についてどのような考えを持っていたかは明かでない。実際に音素分析を試みようとすると大変な困難にぶつかる。最小対立がひとつでもあれば別の音素だとするのであれば、hani- (M IV 61) 「閉じる」と xani- (XM 185) 「満足する」とから、/h/, /x/ という別の音素を認める必要がある。しかし一方で halğa

(M I 126)~xalġa (XM 301)「手のひら」のように h と x とが自由交替する語もある。同様に, šdoġu (M II 2)「シラカバ」と šdogu (XM 316)「老いた」から /ġ/ と /g/ とは別の音素でなければならないことになる。しかし, 一方で ġ と g が自由交替している語が多数存在する。例えば, dzirġuon (VM II 498)~dzirguon (VM II 481)「六」, dziġadzë (W 9)~dzigadzë (VM II 416)「魚」, ġadzier (XM 262)~gadzier (VM II 336)「土地」, ġulġa- (SN 59)~gulġa- (B 91)「火をつける」, kuġuo (Xoni 10)~kuguo (VM II 51)「青い」, silġa- (XM 264)~silga- (XM 267)「振る, 垂れる」。これらの語は『土漢詞典』では jirghoon, ji/aghasi, ghajar, ngulge-, kugo, silgoo- と表記されていることから, 前者三語は本来は ġ, 後者三語は本来は g であると思われる。すなわち音素 /ġ/ には [ġ~g] という異音があり, 音素 /g/ には [g~ġ] という異音があることになる。そして ġ ~ g の交替をするものは /ġ/ のほうが多い。しかしある特定の ġ なり g が /ġ/, /g/ のどちらであるかを決定することは VM I, II からはできない。母音の長短についても同じような問題がある。šdöl- (G 68)「年をとる」と šdol- (XM 284)「切る」を見ると, 母音の長短の弁別があることになるが, 長母音と短母音との間の自由交替は非常に多い。

Schröder (1959: 11) には, ドイツ語の有名な『菩提樹』の歌にたとえて Am brunnen vor dem Tore da steht ein Lindembaum を Ambrunnenvordemtore dasteht einlin dembaum のように, 前の語の後半と次の語の前半をくっつけたような発音をすることがよくあったと記されている。長短が曖昧になっている理由の一つはここにあるのではないかと思われる。しかし第一音節に ā が現れることは稀であるのに, ö は稀ではないのに対し, 第二音節以下には ā は頻繁に現れるのに, ö は稀である。i, ü, ē という長母音は音節の位置に関わらず稀にしか出現しない。

「母」は amā (XM 37) ~ama (MIII 56) という交替形があるのに対し, 「口」は ama (Xoni 1) の形でしか現れない。「口」を amā と発音すること

は、第二音節以下のa~āの豊富なバリエーションから考えて十分ありそうなことであるが、VM I, IIにはこの形は現れない。同様の例を以下に挙げてみる。

	『土漢詞典』	VM I, II	VM I, II	『土漢詞典』
家	ger	ger (MI 42) geri (XM 315)	= geri (Xoni 271) geril (Xoni 135)	geril 北側
猫	mauxi	mōš (XM1 45) mōšë (XM1 44)	= mōšë (xue15) mošë (XM 264)	muxi 前
骨	yasi	yešë (xue 12) yäsë (XM 302)	= yäsë (Xoni 268) yäse (MII 36)	yesi, wesi 草 usi
ネズ	shgo	šgua (B 85) šogë (MI 75)	= šogë (SN 69)	suuge 耳飾り
蓮	Tib. bod mo wadma (VMII 19)	warma (SN 77)	= warma (Xoni 136)	b/warma 科

以上のリストで=の左右だけを見ると同音異義語のように見えるが、自由交替のようすが異なるので、やはりどこかが違っていると考えざるをえない。しかし、交替形のうちのどれが最も基本的なものであるかを決定する手がかりは、出現頻度に頼らざるをえない。次のような場合には「根、台」は「時」と「鷹」とのうちのどちらとの同音異義語なのか決定することはできない。

根、台	s(z)aar	sär (xue 23)	= sär (MIV 40)	sar	時
		sar (Xoni 182)	= sar (xue 5)	saar	鷹

交替形を持たないために、他の資料では同音異義語でない語のペアがVM I, IIでは同音異義語になってしまう次のような場合もある。

無声摩擦音		f	s	š			x	h
無声破裂音			ts	tš				
無声閉鎖音	p		t			k		

明らかに誤植だと思われるものがいくつかある。正しい形の例と共に記す。

誤植	正しい形の例	『土漢詞典』	
dzāndoġ (G 21)	duāndoġ (G 3)	dundog	事情
dzüzw (F 15)	dzüew (Sch 14)	jub	正しい
furi (SII 8)	funi (XM 67)		煙
guri (Xoni 231)	furi (MIV 16)	furi	下の／へ
Ḡesañ (A 63)	ḡuāsaṅ (G 0)	ghuisang	チベット
ku (xue 14)	ki (XM 302)	kii	風
maṅgudzé (XM 189)	maṅgudžë (MI 5)	maṅghusi	マンガス
mōsë- (VMII 224)	mos- (VMII 525)	mosi-	着る
pupunaġ (B 36)	pugunaġ (VMI p. 126 註 36)		蛇(アブ)
sdziōdēz (VMII 258)	sdziodžë (Xoni 294)	xjoosi	樹木
sza- (Xoni 330)	sagë- (B 20)	saagi-	擦る

é とか è という母音は上述の語に一度現れるだけである。ie も二度しか現れないが、ue ~ ue のような交替をしている語が三語現れるので、誤植と見なすべきかどうか判断が難しい。他にも補助記号の付け忘れや付け過ぎがあろうが、実際には誤植かどうかの判断は困難である。

テキストの語彙的特徴

VM I, II にはモンゴル系語彙とチベット系語彙、あるいはモンゴル系語彙と漢語系語彙等の両方がほぼ同じ意味で共存していることがある。一方が少し特殊な意味を持っている場合も含め例を示してみよう。以下語形はもっとも基

本的と思われる形だけを記す。出典は省略する。

	モンゴル 語系語彙	モンゴル文語	チベット語か らの借用語	チベット文庫
枝	sala	sala _γ ā	aralaḡ	ral ga
鼻	xawar	qamar	sēnardzi (鼻輪)	sna+
顔	niur	ni _γ ūr	ndoḡe (顔色)	mdog
犬	noxue	noqai	mpara (野良犬)	phar ba
鳥	šo	siba _γ ū	fsüa	bya
ヒーモリ	kimori	kei mori	loṅšda	rlung rta
仏	purgan	burqan	saṅrēdzi	sangs rgyas
王	xān	qa _γ ān	rēdziawu	rgyal po
星	födē	*podun	sgarma	skar ma
家	ger	ger	gür	gur
国	lusē	ulus	yür (地方)	yul
大きい	šge	yeke	tsien	chen
夜	soni	sōni	muonuo (今夜)	nub mo
命	amēn	amin	le	las
ナイフ	tsidoguo	kitu _γ a	wadam (両刃の)	ba dan
魂	suniedzē	sünesü	namsümē	rnam shes
座る	sō-	sa _γ ū-	yigla- (「敬語」)	bzugs pa

		『土漢詞典』	漢語系語彙	『土漢詞典』	
青い	kuḡuo	kugo	šanlan	shang ¹ lan ² (叢藍)	
皆	halā (皆)		yilē (全部)	ili	西寧の中国語

起源を問わず以下のような類義語がある。

言う	gulie- kilie-	gule- kile-	ügüle- kele-	
行く	yō- sdzi-	yau- xji-	yabu- oči-	
見る	nō- sgē- udzie-	nau- sge- uje-	ono- siqaγa- üje-	
取る	awu- wari-	au- w/bari-	ab- bari-	
作る	šdza- xuarla-	sza-		
建てる	puosǰuo- paǰ- šdzǰǰla-	posgho-	bosγa-	
つなぐ	tōla- kual-	taula- koli-		tao ³ (套)
熱す	bal- tsiade-	ba/oli-	bol-	
焼く	sira- kaŋla-	xiraa-	sira-	
擦る	funǰu- sā-	funǰu-		ca ¹ (擦)
供える	šdodla- šenlie-	xinle-		sdod la
食べ物	idiegu (i)diešē	(i)dexi	ide- idesi	

時	sagu	sagu		
	sār	sar		char
尿	siedzē	xeesi	sigesti	
	sdzīgal	xjaghar		
毛皮	ŋguasē	(n)ghuasi	ungγasu	
	šaŋdē			
たくさん	uluon	ulon	olan	
	yaxange	yaahange	aqui nige	
種類	sāmba	samba		cham pa
	tsiadba			kyad bar
清い	arin	arin	ariγun	
	sirēn	xiren		
チベット	tiwuo	tiwar		
	ǰuāsaŋ	ghuisang		
穴	nukuo	nuko	nūke	
	dzēŋg			
孔雀	dzindzi	jinji		jin ³ ji ¹
	mawya		rma bya	(錦鶏)

土族語にはチベット語、漢語からの借用が多数存在する。どういった語彙に借用語が多いか、以下にごく限られた範囲で述べてみる。モンゴル系語彙というのは、モンゴル文語に対応する形が存在するものをいう。モンゴル文語形自体が借用語であるか否かは問わない。例えば、lama「ラマ」はモンゴル系に含めるが、tsia「お茶」はモンゴル系には含めない。

人称代名詞

モンゴル系

bu 「私」, buda 「我々」, munë 「私の」, ndani 「我々を／に」, ndziena 「自分」, ta 「あなた」, tani 「あなたの」, tsi 「おまえ」, tsinu 「おまえの」, tsinë 「おまえの」

疑問詞

モンゴル系

ani 「どれ」, kân 「誰」, kidë 「いくら」, yan 「何」

その他

andzi 「どこ」

人体、動物の体

モンゴル系

ama 「口」, arasë 「皮」, bere 「脇」, bie 「体」, bölë 「歯茎」, gudzi 「首」, gudzie 「胃」, ġar 「手」, ġuândziäsë 「尻」, ideġ 「膝」, kēlie 「腹」, kilie 「舌」, kual 「足」, kuëdzë 「臍(ヘソ)」, kuġuo 「乳房」, maxa 「肉」, niur 「顔」, nudu 「目」, nure 「背中」, ŋguasë 「毛」, söla 「尾」, šdë 「歯」, šġe 「腱」, tolġue 「頭」, tsidzë 「血」, tsigi 「耳」, xalġa 「手のひら」, xadzier 「頬」, xawar 「鼻」, xurë 「指」, xušë 「口ばし」, yäsë 「骨」

その他

baŋdzë 「翼」, rawa 「頭髪」, šaŋdë 「毛皮」, uruo 「死体」

動物名

モンゴル系

asë 「牛」, basë 「虎」, buru 「仔牛」, daġa 「仔馬」, dzidziġa 「動物の仔」, dziġadzë 「魚」, funigë 「狐」, gugu (šo) 「カッコウ」, luosa 「ラバ」, moġue

「蛇」, mori 「馬」, noxue 「犬」, sadziġa 「カササギ」, sira šo 「フクロウ」,
šo 「鳥」, unie 「雌牛」, xoni, xonima 「羊」, xorġue 「虫」, yima 「山羊」

その他

amdziġa 「雀」, ardaġ 「獣」, dzindzi 「孔雀」, ġla 「麝香鹿」, ġlumu 「ナー
ガ」, kadan 「狼」, mawya 「孔雀」, mōš 「猫」, mdzion 「野生のヤク」,
musë 「ヤク」, nirwa 「鴨」, ŋgusge 「鳩」, pugunaġ 「虻(アブ)」, sar 「鷹」,
šambā lafdzin 「蝶」, šbawoġ 「蛙」, šgesār 「コウライウグイス」, tsion 「ガ
ルダ」, tsüseril 「亀」

動物関連語彙

モンゴル系

basë 「糞」, fuogë 「脂肪」, fuorë 「巢」, ndigë 「卵」, nimbudzë 「涙」,
siadzë 「小便」, soldzë 「胆汁」, yara 「傷」

その他

sdzibal 「糞」, xuorġudzë 「羊糞」

植物名

モンゴル系

dzändan 「白檀」, luosë 「麻」

その他

gëdzë 「カラシ菜」, gušgum 「サフラン」, känba 「蓬(ヨモギ)」, šdoġu 「シ
ラカバ」, šgua 「ネズ」, taŋġeraġ 「松」, wadma 「蓮」

植物関連語彙

モンゴル系

furie 「種」, lašdzi 「葉」, mōdë 「木材」, sala 「枝」, sdziodzë 「樹木」,
tsidziġ 「花」, xaġ 「芒(ノギ)」, yäsë 「草」

その他

aralaḡ 「枝」, korë 「粒」, nadzë 「芽」, uosë 「芽」

親族名称

モンゴル系

aba 「父」, adzia, awu 「兄」, bieri 「妻」, do 「弟」, fsdzün 「娘」, ku 「息子」, mugän 「婆さん」, uruḡ 「親戚」, wōmoḡ 「氏族」

その他

agu 「おば」, ama, anë 「母」, anie 「お婆さん」, bulë 「子供」, gadu 「友達」, 兄弟, idzie 「姉」, laoxän 「夫」, samu 「姪」, tsindziaḡ 「家族」

自然現象

モンゴル系

dzierma 「霰(アラレ)」, ki 「風」, noḡdzil 「雷雨」, siudërë 「露」, uloḡ 「雲」, xura 「雨」

その他

sëmukuo 「霧」, toḡ 「稻妻」

人

モンゴル系

asëndzi 「牛飼」, daldëndzi 「商人」, lama 「ラマ」, paḡši 「徒弟」, purḡan 「仏」, xän 「皇帝」, xolḡue 「泥棒」

その他

ḡueḡdzi 「乞食」, kaguluan 「敵」, luängëdzin 「祈禱師」, nawdzuo 「画家」, ndžuo 「客」, saḡrëdzzi 「仏」, Rëdziawu 「王」, saḡ 「活仏」, sëmtsizien 「衆生」, tsiandë 「強盗」, wosëronḡ 「加葉仏(カシ ョウブツ)」, xuawu 「兵士」, yaxaḡ 「仲買人」

飲食物

モンゴル系

alima 「果物」, derasë 「酒」, diešë 「飲物」, fdzë 「水」, idiegu 「飲物」,
rëmien 「乳皮」, sun 「乳」, šbë 「裸麦」, tara 「穀物」, tōdzë 「油」

その他

baġ 「果実」, amela 「リンゴ」, fsier 「大麦」, ġara 「砂糖」, mântō 「饅頭」,
nguma 「粥(カユ)」, tsia 「お茶」, yayi 「炒麦」

天体

モンゴル系

födë 「星」, tiengër 「天」, nara 「太陽」, sara 「月」

その他

sgarma 「星」

四季

すべてモンゴル系以外

rëguli 「冬」, riyär 「夏」, sili 「春」, šdon 「秋」

数詞

すべてモンゴル系

dalan 「七十」, dieran 「四」, dōlon 「七」, dzioŋ 「百」, dziran 「六十」,
dzirġuon 「六」, ġuor 「二」, ġuran 「三」, mieŋxan 「千」, neman 「八」,
nigë 「一」, šdzën 「九」, tawën 「五」, xaran 「十」

位置, 方向

モンゴル系

derë 「上」, doro 「下」, dunda 「中」, dziuruo 「間」, ġada 「外」, ndiere

「ここ」, sergu 「南側」, solǰue 「左」, šdoro 「中」, tiendě 「そこ」, tišě 「上」, waroŋ 「右」

その他

geril 「北側」, roǰ 「方向」, sdzi 「中心」, smad 「低地」, warloŋ 「中部」

場所, 地形

モンゴル系

ayil 「村」, bulaǰ 「泉」, dali 「海」, ģada 「岩」, ģadzier 「土地」, ģuoli 「谷」, mōr 「道」, muoruon 「川」, nukuo 「穴」, siru 「土」, ula 「山」

その他

badzere 「城壁」, daŋǰul 「土塊」, dzēng 「穴」, dziaw 「山腹」, lašdzi 「オボ」, natan 「沼地」, ndzikua 「耕作地」, ndziamba 「川岸」, rēduomben 「墓の上に置く魔除けの石」, sār 「麓」, taŋ 「平原」, tašě 「石」

建物

モンゴル系

ger 「家」, puosǰuo 「敷居」, dzuǰuo 「竈(カマド)」, udie 「入口」

その他

bikār 「天幕」, gāndziāra 「庇(ヒサシ)飾り」, gūr 「家」, ģarkaŋ 「炕」, lödzě 「建物」, ndoǰon 「経堂」, paŋ 「家畜小屋」, pi 「炕」, rēguomba 「寺院」, sasa 「仏塔」, saŋ 「階」, šadzě 「テラス」, tsüerǰuo 「錠」, yösě 「鍵」

時

モンゴル系

durě 「日」, fān 「年」, niudur 「今日」, soni 「夜」, šdedzi 「早朝」, šdonon 「去年」

その他

di 「時」, malaŋ 「明日」, muonuo 「今夜」, sdziaroŋ 「朝」, sagu 「時」, sār 「時」, silaŋ 「夜」, sirō 「午後」

金属

モンゴル系

miengu 「銀」, timur 「鉄」, xaldan 「金」

衣服, 装飾品

モンゴル系

diel 「服」, šdadzë 「糸」, šogë 「耳飾り」, torġuo 「絹」, waŋsirë 「長衣」, xorme 「前掛け」

その他

dzaŋrë 「簪(カンザシ)」, rëdza 「外衣」

具体名詞

モンゴル系

aroġ 「背負い籠」, budoġ 「小縄」, buliu 「砥石」, doŋ 「ほら貝」, dziu 「針」, dzüla 「明かり」, gurdziaġ 「鋏(スキ), シャベル」, ġal 「火」, kuo 「煤」, lëmu 「弓」, maldzë 「氷」, ndziesë 「鋏(スキ)」, sëmu 「矢」, siawar 「粘土」, siel 「ガラス」, solġa 「桶」, šdidëguo 「ナイフ」, šëmu 「木釘」, tsiduguo 「ナイフ」, tuġuo 「鍋」, tulun 「袋」, woldë 「刀」, xoŋġuor 「鈴」

その他

barġal 「罌」, bodzia 「留め金」, darmu 「旗」, dëndzia 「軛(クビキ)」, diel 「縄」, dziengoŋ 「容器の台」, dzigëdzi 「墓」, fsaŋ, funi 「煙」, gaŋ 「瓶」, gändzë 「柄」, garloŋ 「留め金」, gëdaŋgë 「座布団」, gudzioġ 「織機の部分」, guod 「光」, kasga 「裂け目」, kuëdzë 「結び目」, kuorluo 「輪」, luo 「ドラ」, lutsi 「車軸」, mawu 「布巾」, mudzë 「馬鋏(マグワ)」, nãnsi 「樽」, pandzë

「皿」, sdier 「供え物」, sdzio 「鞭」, sdziora 「割れ目」, sēnardzi 「鼻輪」, sēnoḡder 「宝瓶」, sēr 「お金」, sguora 「輪」, siabsirē 「鞭紐」, siaḡdzē 「箱」, sman 「薬」, tādztu 「曼陀羅」, tesma 「革」, tsiendzē 「ペンチ」, tsiewdzi 「針箱」, tsuomdzia 「武器」, wadma 「両刃のナイフ」, warma 「秤」, wumtsü 「水瓶」

抽象名詞

モンゴル系

amēn 「命」, dō 「歌」, duran 「気持ち」, dziawloḡ 「苦難」, funir 「香り」, ḡudal 「嘘」, nasē 「年齢」, niere 「名前」, nuor 「眠り」, sgil 「心」, suniedzē 「魂」, ugo 「ことば」, xari 「返事」

その他

adal 「生活」, darsē 「習慣」, doḡsi 「事」, duāndoḡ 「事情」, duan 「こと」, わけ」, dzilḡuo 「感謝」, dḡuaḡdzia 「収穫」, far 「方法」, härgēguni 「軌道」, hasdzin 「善行」, läntsioḡ 「業」, le 「生命」, lisga 「仕事」, loḡ 「方法」, 様子」, namsümē 「魂」, nāntsidiē 「困難」, niedzoḡ 「苦勞」, ntsam 「坐禅」, nuosoni 「不幸」, ḡgasdzi 「不幸」, rāmba 「種類」, redzē 「成分」, rēkua 「知識」, rēlan 「湿気」, sāmba 「種類」, sdzūän 「心配」, siašdaḡ 「噂」, siergēgu 「円周」, soḡ 「祈禱集会」, süntsiedgeni didē 「来世」, šdaḡ, šdiemdžēl 「兆候」, šdorma 「宴」, šdotsia 「賛美歌」, šemuluon 「仕事」, šenalḡa 「悲しみ」, šge 「源」, tsiadba 「種類」, 区別」, udiewa 「平和」, wašga 「運命、幸運」, xdzoḡ 「指示」, xuawu 「武術」, xue 「故事」, yōro 「声」

色

モンゴル系

fulan 「赤」, kuḡuo 「青」, sira 「黄色」, tsiḡan 「白」, xoḡḡuo 「紅」

その他

šaŋlan 「藍」, yalaŋ 「藍」

形容詞

モンゴル系

arin 「清い」, dziolan 「軟らかい」, dzüew 「正しい」, gegen 「明るい」,
kueidien 「冷たい」, kundun 「重い」, moluog 「丸い」, narin 「細い」, nitien
「湿った」, sorën 「涼しい」, sen 「良い」, sexan 「美しい」, šdogu 「老いた」,
šge 「大きい」, šoġtsien 「賑やかな」, tarġan 「太っている」, tiewšen 「平ら
な」, tsiraġ 「丈夫な」, uluon 「多い」, undur 「高い」, xadoŋ 「硬い」, xaloŋ
「熱い」, xaraŋgu 「暗い」, xödžën 「空の」, xoluo 「遠い」

その他

araŋka 「普通の」, gatiën 「多い」, guŋdoŋ 「公平な」, luosuo 「面倒な」,
mula 「小さい」, odë 「広い」, sialdzi 「貴重な」, sirën 「清い」, šëniŋrëdži
「可愛そうな」, šgamu 「難しい」, tsien 「大きい」, yäruo 「しゃがれた」

副詞

モンゴル系

semugier 「秘かに」, udam 「ゆっくり」

その他

doġmu 「はっきり」, daron 「さらに」, dišë 「詳しく」, dödë 「いったい」,
dziaŋdë 「すぐに」, maka 「まもなく」, šörda 「すぐに」, häna 「みんな」,
yilë 「全部」

参 考 文 献

- 哈斯巴特爾, 他編 (1985) 『土族語詞彙』 (Monġor kelen ü Üges) 内蒙古人民出版社
互助土族自治県民族語文辯 (1982) 『土漢対照詞彙』 (Monghol Qidar Harilqilegu Ugosge)
互助土族自治県民族語文辯公室翻印

- 李克郁編（1988）『土漢詞典』（Mongghul Qidar Merlong）青海人民出版社
- 魯長壽（1986）「大力試行土族文字提高文化水準」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』四川民族出版社 58-66
- 呂光天（1981）「青海土族的語言與來源關係」呂光天著『北方民族原始社会形態的研究』寧夏人民出版社 507-522（初出は1955年第三輯『中国民族問題研究集刊』）
- 孫竹，吳安其（1990）「從試行到推行的土族文字」『民族語文』一九九〇年第二期 18-22
- 《土族簡史》編寫組（1982）『土族簡史』青海人民出版社
- 席元麟（1985）「土族語音位系統」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』395-405
- 照那斯圖（1981）『土族語簡誌』民族出版社
- 照那斯圖（1987）「土族語」中央民族学院民族語言研究所編『中国少数民族語言』四川民族出版社 619-629
- 照那斯圖，李克郁（1982）「土族語民和方言概説」《民族語文》編輯部編『民族語文研究文集』青海民族出版社 458-487
- 席元麟（1986）「土族語音位系統」中国民族語言学会編『中国民族語言論文集』395-405
- 服部二郎（1959）「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』第36号 40-54
- 樋口康一（1983）「チベット語と土族語の言語接触について」『チベット文化の総合的研究』（昭和57年度特定研究報告書）76-84
- 角道正佳（1987）「土族語の下位方言」『大阪外国語大学學報』第75-1.2号 49-63
- 角道正佳（1988a）「Geser rëdzia-wu の言語—自由文替—」『大阪外国語大学學報』第76-1.2号 25-50
- 角道正佳（1988b）「Geser rëdzia-wu の言語—分布—」『大阪外国語大学學報』第76号 23-44
- 角道正佳（1989a）「モンゴル語（土族語）の位格と与位格の用法について」『日本モンゴル学会紀要』No.19, 30-39
- 角道正佳（1989b）「土族語（モンゴル語）における接尾辞 -ngge について」『大阪外国語大学論集』第1号 1-27
- 角道正佳（1990a）「土族語（モンゴル語）の一方言の自由交替—Aus die Volksdichtung der Monguor の言語—」『大阪外国語大学論集』第3号 65-91
- 角道正佳（1990b）「土族語の正書法」『大阪外国語大学論集』第4号 49-76
- 栗林 均（1989）「モンゴル語族と近隣の諸言語との言語接触—中国青海省，甘肅省の「孤立的」モンゴル系諸言語を中心に—」早稲田大学北方言語・文化研究会『民族接触—北の視点から—』六興印刷 273-289
- 斎藤純男（1983）「モンゴル語の音韻体系」『言語・文化研究』創刊号 東京外国語大学大学院外国語研究科言語・文化研究研究会 9-17

- Čingeltei (1981) 'Mongγor kele beki qoyar tusalaqu üyile üge yin tuqai,' *Öbür mongγol un yeke surγayuli yin mongγol kele bičig sudulqu γafar un kele bičig ün erdem sinžilgen ü ügüel ün tegübüri*, dörbedüger debter, 35-42.
- Hattori Shirō (1972) 'Initial Plosives of Proto-Mongolian and Their Later Developments —With Two Additional Remarks—,' 『言語の科学』第3号 117-136
- Heissig, Walther (1980) *Geser rēdzia-wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tujen)-Version des Geser Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden. (GR)
- Mostaert, A et A. de Smedt (1929-30) 'Le dialecte Monguor parlé par les mongoles du Kansou occidental, I^e partie, Phonetique,' *Anthropos* XXIV, 145-165, 801-815, XXV, 657-669, 961-973.
- Róna-Tas, A. (1960) 'Remarks on the Phonology of the Monguor Language,' *Acta Orientalia Scientiarum Hungaricae* X/3, 263-267.
- Róna-Tas, A. (1962) 'On Some Finals of the Monguor Language.' *Acta Orientalia Scientiarum Hungaricae* XIV, 283-190.
- Róna-Tas, A. (1966) *Tibet-Mongolica, The Tibetan Loanwords of Monguor and the Development of the Archaic Tibetan Dialects*, Mouton & Co., The Hague.
- Schröder, Dominik (1959) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 1. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden. (VMI)
- Schröder, Dominik (1964) 'Der Dialekt der Monguor,' *Handbuch der Orientalistik*, Bd. 5, Absch. 2, *Mongolistik*, Leiden/Köln, E. J. Brill, 143-158.
- Schröder, Dominik (1970) *Aus die Volksdichtung der Monguor*, 2. Teil, Otto Harrassowitz, Wiesbaden. (VMII)
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1933) *Le dialecte Monguor parlé par les mongoles du Kansou occidental*, III^e partie, Dictionaire Monguor-Français, Imprimerie de l'université Catholique, Pei-p'ing. (DMF)
- de Smedt, A. et A. Mostaert (1964) *Le dialecte Monguor parlé par les mongoles du Kansou occidental*, II^e partie, Grammaire, Mouton & Co., The Hague.
- Потанин, Г. Н. (1960) Тангутско тибетская окраина Китая и центральная монголия, Государственное издательство географической литературы, Москва.
- Тодаева Б. Х. (1960) Монгольский языки и диалекты Китая, Москва.
- Тодаева Б. Х. (1973) Монгорский язык, издательство «наука» главная редакция восточной литературы, Москва.